

優秀賞

【総合／道徳／家庭科／生徒会活動】

生徒と共に考え創造性を 育てていく教育の実践

千葉県大網白里市教育委員会

しの はら こう じ
篠原 孝司



1 | はじめに

(1) これからの学校教育で育てたい力

今までの学校教育では、教師が知識を伝えることに重点をおき、子どもたちはその知識を使って問題に答えるという授業スタイルが多く見られた。私たち教師は、多くの場面で、子どもたちの知識を素早く引き出し、正確に問題に答えることを求めてきた。しかし、実社会における「問題」は、分かりやすく問題として現れることはなく、その答えも一様ではない。変化の激しい現代においては、身の回りにある問題は、さらに複雑で予測困難となってきた。従来のように教師が与えた課題に対して、子どもたちが答えを導き出す教育だけでは、これからの社会を乗り越えていく力を育むことは不十分である。このような時代だからこそ、生徒1人1人が、自ら問題を見つけ、主体的に向き合い、これまでになかった解決方法を見いだして行動する力（創造力）を育むことは重要である。

(2) 本当に自分たちの問題になっているのか

本校では、生徒たちに「自ら問題を見つけ解決していくことの大切さ」を指導してきた。各教科においても、多くの教師が「自ら問題を見つけ、その問題を解決していく」という授業スタイルを意識してきた。しかし、どのような授業であって

も、事前に教師が考えた流れ（教師側から与えられた課題）があり、生徒自身が見つけた問題ではないと感じていた。

そのようなときに、私の学級の生徒A（3年生）から「殺処分されるペットが可愛そうです。学校で犬を飼うことはできませんか？」という話を持ちかけられた。いきなり学校で犬を飼うという発想は安易な考えであるとも感じたが、この言葉は、彼女が生活している実社会での「問題」であり、それを解決するために自分の力を試してみたいと心の底から感じて出てきた言葉であると感じた。そこで「すぐに犬を飼うことは難しいかもしれないが、今の自分たちに何ができるのかを探してみよう」と提案した。これが、本実践を行うことになったきっかけである。

2-1 | 令和3年度の実践 「殺処分0に向けての取組」 (令和3年4月～令和4年3月)

(1) きっかけ

生徒Aは、小学生の頃から動物を保護する活動に興味があった。日本での犬や猫の殺処分の現状を知り、犬や猫などの動物の命を守りたいという思いがあった。中学3年生の4月、友達との何気ない会話から「中学生の自分たちにも今からできることはないだろうか」という話になった。そ

の後、担任である私に声をかけてきた。

(2) できることを考える

その日の放課後、生徒Aを含む5名の生徒(彼女から相談をもちかけられ快く協力してくれた生徒たち)とともに「マインドマップ」を作成しながら、思いつくことを全て書き出した。その後、自分たちが実現できそうなこととできないことに分けた。

【実現できそうなこと】

- ・日本の殺処分現状を調べ、多くの人に伝える。
- ・ポスターを作り、掲示する。
- ・殺処分場や保護施設を見学する。

【実現できないこと】

- ・犬を飼う(お金・場所・臭いの問題・卒業したら面倒を見られない)。
- ・募金やクラウドファンディングでお金を集める(お金の管理が難しい)。

生徒たちは、最初に考えた「学校で犬を飼うこと」は中学校ではできないという現実を知り、落ち込んでしまうのではないかと思ったが、中学生の自分たちだからこそできることがたくさんあると前向きに捉えていた。

自分たちのできることの中から、まずは「周りの人に伝えること」からスタートした。そこで、生徒たちは休み時間に1人1台配付されたパソコンを使ってWebサイトで殺処分の現状を調べた。放課後は殺処分場や保護活動をしている団体と連絡を取り、情報収集をした。次に、自分たちの調べた情報を誰にどのような形で伝えるのが良いかを検討した。伝える相手は学級の仲間。伝える方法は道徳の授業。生徒Aを含む5人が授業者となり授業を実践することとなった。

(3) 事前準備

生徒Aから「犬を飼いたい」と話をもちかけられてから1か月後、自分たちが実践する道徳授業の指導案とワークシートを完成させた。少しのア

ドバイスはしたが、ほとんど生徒たちの力で作成した。

放課後の時間を使い、模擬授業を行った(図1)。模擬授業の様子をビデオで撮影し、動きや言葉を自分たちで確認をした。予想される質問なども考え、質疑応答集も作成した。



図1 模擬授業の様子

(4) 学級道徳授業(令和3年5月13日)

授業のタイトルは「飼う? 買う? ～命の価値～」。

犬や猫の殺処分の現状を話し、自分たちに何ができるのかを考えさせる授業内容であった。学級の生徒たちは、級友が時間をかけて準備したことを知っており、温かい拍手から授業がスタートした。授業の導入部分では、日本の殺処分の現状をグラフや映像を用いて伝えた(図2、3)。展開部分では、学級の生徒を5～6人の班隊形にして「中学生の自分たちにできること」を考えさせ、ホワイトボードにまとめた(図4)。最後に各班の考えを発表した。

【生徒たちの考え】

- ・ポスターをペットショップなどに貼ってもらい、これからペットを飼おうとしている人に殺処分の現状を伝える。
- ・今回行ったような道徳授業を他学年にも行う。
- ・自分たちで、殺処分される犬・猫を引き取る。



図2 学級道徳授業風景①



図3 学級道徳授業風景②



図5 体育館での説明①

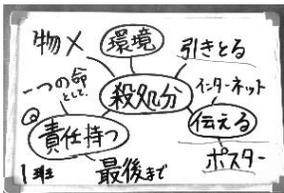


図4 意見のまとめ



図6 体育館での説明②

(5) 学年道徳(令和3年6月10日から3回実施)

学級での道徳授業の後、学級の生徒1人1人が、生徒Aの問題を自分自身の問題として考える雰囲気が生まれた。学級の生徒たちの口から「次は学級の生徒37名が授業者となり、他学年に今回の道徳授業を行いたい」という意見が出た。

本校の生徒数は756名おり、1学年でも257名(7学級)在籍している。そこで、学年の生徒を体育館に集め、スクリーンを使って説明し、その後、教室に戻って話し合いをするという流れで授業を行うことにした。

① 体育館での説明

1年生が体育館に入場し、学年道徳が開始された。1年生257名の前で5人が殺処分の現状について説明した(図5、6)。はじめに生徒Aから「自分たちがどのような思いをもって、この活動に取り組んでいるのか」を話した。途中、生徒Aが緊張から言葉に詰まったときに、隣にいた仲間が優しく生徒Aの背中をさすっていた。「私たちがいるから緊張しなくても大丈夫」という優しい気持ちが見られた一瞬であった(図7)。



図7 体育館での説明③

② 1年生の各教室で話し合い

教室に戻ってからは、班ごとにマインドマップを描きながら、「殺処分0」に向けて何ができるのかを考えさせた。各教室でスムーズに指示が出せるように授業者の生徒37名を7グループに分けた。各クラスの授業者を5名として、次ページのように1人1人の役割を決めて授業に臨んだ。

各教室での話し合いは、とても活発に行われた。授業者である3年生の生徒は、メモをとりながら各班の話を聞き、1年生の生徒に「ここをもう少し具体的に考えようか?」など助言していた。事前に生徒Aたちが、質疑応答集を作成していたが、それでも分からない質問があれば、その内容をPC係が他クラスの授業者と共有して、分かる生徒が答えていた。また、質問内容を素早くWebサイトで検索して答えをチャットに入力するなど、自分たちで工夫して解決方法を考えることができた(図8)。

的確に判断し進行する司会者、それをサポー

トするために助言する人、パソコンを使い他のクラスで出た意見を伝える人、必要なものを準備する人、全員が連携を取りながら授業を進めた。学級の全員が自分の役割をもち、当事者意識をもって取り組んだからこそできた授業であると感じた。

- ・司会者………各学級での話し合いの司会進行を行う。
- ・サポート係…司会のサポート。他クラスから出た意見等を司会者に伝える。
- ・P C係………Web会議アプリのGoogle Meetやチャットを使用し、他クラスと連絡を取り合う。他のクラスで出た良いアイデアなどの情報交換をリアルタイムで行った。
- ・集配伝達係…ホワイトボードの準備。各班への助言や出た意見のメモを取り、司会やP C係に伝達する。



図8 PC係の様子

③ 授業後

1年生への授業の後、2年生、3年生(3年A組以外の学級)にも同じ内容の学年道徳を行った。授業後、後輩たちから「先輩たちのようになりたいです」と言われた生徒もいた。同じ中学生である先輩が教師のように授業する姿は1、2年生にとってあこがれの存在となった。授業後、後輩たちからの感想文も届いた。授業を行ってくれたことへの感謝の言葉がたくさん書かれていた。後輩からの感想文を見て「授業をやって良かった」という気持ちがさらに高まった。生徒Aたちは、全校生徒756人の感想文に赤ペン

でコメントを入れて返却した。

【授業後の生徒(授業者)の感想】

生徒Aの呼びかけで、学級のみんが「私も手伝うよ!」と協力しました。本番の5人が前に出て、真剣に話していた姿は中学生とは思えないくらい立派でした。各クラスの授業もみんなが一丸となって授業をやっていました。自分もこれから何か行動をするときに「自分はまだ中学生だからできない」と考えないで、できることからやっていくという思いをもって生活していきたいです。

(6) さらに続けて

学年道徳では、全生徒に「殺処分0にするためにできることは何か」を考えてもらった。その中に自分たちでポスターを作りたいという意見が多くあった。生徒Aは、全校放送を使って、学年道徳でどのような意見が出たのかを伝えた。その意見の中で出たポスター作りを全校生徒に協力してもらえるように呼びかけた。生徒Aたちは、以前から保護猫カフェやペットショップや殺処分場に連絡を取り、見学に行っていたので、それらの場所へ学校で作成したポスターを掲示してもらうことにした。初めは、生徒Aの思いから始まった活動だが、いつの間にか学級の全員が自分たちの問題と捉え、自分たちの力で解決していこうとする大きな流れとなった。この後、3年生は受験の時期となったが、自分たちの活動を作文にまとめてコンクールに出す生徒や、オリジナルのポストカードやクリアファイルを作成する生徒など、それぞれの生徒たちが自分たちのできることを考えて取り組んだ(図9)。

生徒Aたち3年生の卒業式ではコロナ感染拡大防止のため在校生は出席できないことになった。そこで、3年生から在校生にメッセージを伝えるための動画撮影ができないかという提案があった。生徒Aたちは「中学生の今だからこそできることがある」というメッセージを後輩たちに残した。



図9 生徒が作成したクリアファイル



図10 生徒Bのノート

2-2 令和4年度の実践I 「食品ロス0に向けての取組」 (令和4年4月～令和4年12月)

(1) きっかけ

生徒B（3年生）は、環境問題に興味があり、昨年度の先輩（生徒A）たちのように、自分にも何かできることがあるのではないかと考えていた。私は教務主任という立場になり、担任をもっていなかったが、生徒Bから相談を受け、一緒に考えることとした。

(2) できることを考える

生徒Bは環境問題を解決していくための取り組みとして、各教室に古紙回収ボックスを設置し、各家庭で出た古紙を学校に持ってきてもらうという案を考えた。しかし、ゴミ（古紙）が増えていくことは、根本的な環境対策にはならないと考え、今自分たちが無駄にしているものを削減していく方法を探すことにした（図10）。環境問題は世界中での問題であるが、学校でできる一歩として学校から出るゴミ（給食の残菜）を減らすことならできるのではないかと思いついた（グローバルな視点で考えるように指導した）。そこで、まずは給食がどれくらい残されているのか、その現状を調べることにした。

(3) 事前準備

次の日から、生徒Bは、栄養士の先生に声をかけ、毎日、給食後の昼休みに残菜の写真を撮り記録した（図11、12）。学年によって残菜の量に差があることや多くの牛乳が手をつけることなく捨てられていることに気づいた。

この活動を1か月ほど続けるなかで、興味をもった14名の生徒（他クラスを含む3年生の生徒）と一緒に活動することとなった。多くの給食が捨てられているという現状を全校生徒にも伝えたいと考え、昨年度に先輩たちが行った学年道徳と同じような形式で授業を実施することとした。また、毎日の残菜を記録していくなかで、栄養士の先生とのつながりが深まり、学年道徳ではゲストティーチャーとして話をしてもらうことにした。

生徒Bを中心とした数名の生徒たちとともに指導案、ワークシート、スライドを作成した。この時期になると生徒たちは昨年度から1人1台配付されたパソコンを効果的に活用できるようになっており、昼休みなどの時間を使って自分たちでパソコンを操作して様々な資料を作成することができた（図13）。



図11 牛乳の残り



図12 パンの残り



図13 資料確認の様子



図14 体育館での説明①



図15 体育館での説明②



図16 生徒の意見

(4) 学年道徳(令和4年10月27日から3回実施)

授業のタイトルは「いただきますの責任」。3年生、2年生、1年生の順で学年道徳を行った。授業の導入部分は体育館でスライドを使つての説明、展開部分は各学級での話し合いを行った。導入部分の説明では、日本や世界での廃棄される食品の量をクイズなどで質問した。また、生徒たちに日常生活で食べ物を無駄にしている場面などを発表させた。生徒Bは今まで記録してきた給食の残菜の写真をスライドで見せながら食べ物を大切にしてほしいという思いを伝えた。ゲストティーチャーである栄養士の先生は、約800人分のおかずを調理している様子や残った牛乳を廃棄している調理員の様子を事前に撮影し、その映像を見せながら「毎日どのような思いで給食を作っているのか」を伝えた(図14、15)。

展開部分での各学級の話し合いでは、「給食を残さないようにする」など、気持ちの面での意見が多く見られた。それ以外にも給食の配膳の仕方の工夫(残さない量を配膳する)や、ポスターの作成(ご飯の盛り付け方)、楽しく食べられるような昼の放送の工夫などの具体的な対策も考えられた(図16)。

(5) 学年家庭科(令和4年12月8日)

3年生の学年道徳の話し合いのなかで「みんなが完食したくなる給食の献立を自分たちで考え、実際に調理員さんに作ってもらいたい」という意見があった。そこで、家庭科で献立作りの授業を行うこととした。私は生徒Bと共に、栄養士の先生と家庭科の先生に話をしたところ快く承諾していただいた。栄養士の先生と家庭科の先生が授業者となり、3年生で学年家庭科を行うことになった。

学年家庭科の授業の導入部分では、パソコン画面を各教室のテレビ画面に映して(Chromecast)生徒に説明した。生徒たちが作った献立を実際に給食に出すため、以下の注意点を伝えて、その範囲の中で考えさせることとした。



図18 牛ニュース(左:日本語 右:中国語)



図19 モウモウクラブの掲示板
(レシポカードは品切れ)

2-3

令和4年度の実践Ⅱ「ジェンダーフリーに向けての取組」
(令和5年2月～令和5年3月)

(1) きっかけ

生徒C(2年生)は、1年生の頃に生徒Aの授業を2年生の頃に生徒Bの授業を受け、自分もそのような活動ができるのではないかと考えていた。2年生では、総合的な学習の時間に「SDGsについて学び、自分のできることについて考える」という授業を行っていた。生徒Cは、SDGsの5項目の「ジェンダー平等を実現しよう」について関心をもった。調べていくうちに、本校の様々な問題が見えてきた。

私に相談に来たときにはすでにノートに様々な疑問点や今後の取組について具体的にまとめている(図20)。

【生徒Cの考え】

- ・トイレのマークの色が異なること。
- ・制服が男女で違うこと(スカートを履きたい男子生徒やズボンを履きたい女子生徒にとって男女別の制服を着ることは苦痛になるのではないか)。
- ・先生方が「～さん」と「～くん」で区別して呼んでいること。

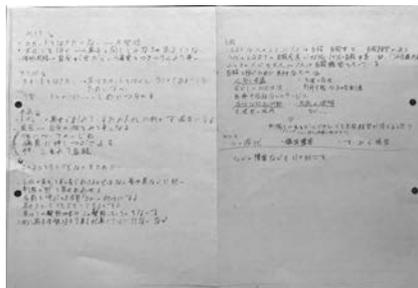


図20 生徒Cのノート

(2) できることを考える

生徒Cは、初めに全校生徒にジェンダーフリーについて知ってもらいたい、その後、学校にある様々な問題点を解決していきたいと考えていた。私のところに話に来たときには、すでに今後の大まかな流れをノートにまとめている。私は、先輩たち(生徒Aと生徒B)が、これまでどのように準備してきたかを生徒Cに伝え、授業として使いたい時間や場所を考えておくように伝えた。

その後、生徒Cは、協力してくれる仲間(1、2年生を含む22名)を募り、これまでの先輩たちのように指導案、授業プリント、スライドを作成した。資料作成は、すべて生徒たちだけで取り組んだ。休み時間にスライドやドキュメントを共有設定に

して複数名が同時進行で資料を作成した(図21)。共有設定では他の教室にいても作業ができるため、数週間で資料が完成した。完成した資料を見せてもらい生徒と一緒に修正をした。



図21 資料作成の様子

(3) 全校道徳(令和5年3月16日)

これまでの学年道徳では、学年生徒を体育館に集めて説明していた。そこで、生徒Cから「各学年で3回授業を行うと時間がかかるので、パソコン画面を各教室のテレビ画面に映して(Chromecast)、全校生徒一斉に授業を行いたい」という提案があった。

授業のタイトルは「誰もが自分らしく」。全校一斉(3年生は卒業している)での道徳授業を実施した。授業の導入部分では、スライドを使用してLGBTQ+についてや、学校にある様々な男女の違い(トイレのマークなど)を説明した(図22、23、24)。展開部分では、各班で男女関係なく誰もが自分らしく過ごすにはどうすれば良いのかを考えさせた。生徒たちからは、制服を変えて選択できるようにすることや男女によるスクールバックの色分けを廃止することなどの意見が出た。



図22 授業者の様子(リモートでの指示)



図23 導入部分の様子



図24 展開部分の様子

3 | 生徒が主役の学校へ

(1) 全校生徒への広がり

2年間、生徒たちは様々な問題の解決方法を自分たちで考え行動に移してきた。この活動が始まってから、生徒が主体となった活動が全校生徒に広まった。学校職員も生徒と共に考え、様々な活動を支えてきた。この2年間で、生徒の意見からスタートした活動は、学年道徳以外では以下のようにになっている。

① 頭髪の校則変更(生徒会本部)

生徒総会で頭髪の見直しを行った。生徒にアンケートを行い、生徒総会にて頭髪のルールを決定した。

② ノーチャイムをやめてチャイムを鳴らす(生徒本部・生活委員)

チャイムが鳴ったほうが過ごしやすい生徒がいる(ユニバーサルデザインの視点)と考え、チャイムを鳴らすように変更。どの時間にチャイムを鳴らせば良いのかも考えた。

③ 黙働清掃から会話清掃へ変更(美化委員)

誰もが過ごしやすい学校を目指したときに、会話しながらの清掃が良いと判断し、変更した。

④安全指導の充実(生活委員)

全校生徒に登下校時の安全調査を行い、学校の周りの道路をゾーン30にしたいという要望があがった。学校職員と生活委員長が警察に電話をして相談した。

⑤異学年交流会の実施(生徒会本部・評議員)

異学年の生徒との交流する時間がほしいという要望があり、1、2年生の交流会を実施した。交流会の内容(宝探し、じゃんけん列車、猛獣狩り、大縄跳び、フォークダンス、有志によるダンス発表)は、生徒アンケートをもとに決定した。

生徒たちが「やりたい」と思ったことを全て実行させるのではなく、やりたいことがあればきちんとした原案を作らせ、以下のような手順で進めていくように指導した(上記の②～⑤の活動に関しては全て下記のア～キの流れで実施)。

- ア. 生徒が作った原案を職員と検討する。
- イ. Google Meetを使い、全校生徒へ提案内容を伝える(図25)。
- ウ. 全校生徒にGoogle Formsでアンケートを実施する。
- エ. アンケート結果を分析し、生徒(生徒会本部)で方向性を決定する。
- オ. 生徒会本部から、担当教員に提案する。
- カ. 職員(生徒指導部会、学年主任会など)で検討し職員会議で決定する。
- キ. Google Meetを使い、委員長・生徒会本部役員から全校生徒へ決定事項を周知する。



図25 全校生徒への放送

することは不可能ではないか?」という質問があった。その質問に対して、授業者のある生徒が「私たちの力では殺処分0にすることは難しいかもしれないが、できないからやらないのではなく、限りなく殺処分0に近づけるためにこのように授業をしている。だから、どうなるのかという結果だけではなく、今、活動をしているという経験にこそ価値がある」と答えていた。

このような生徒の姿から「子どもは自分の問題であれば、解決するために指示がなくても自然と学んでいき、そのプロセスに価値を見いだすことができる」ということに気付かされた。もともと、子どもたちには学びたいという気持ちが備わっていて、自分で見つけた問題に対しては自ら学ぼうとする。私たち教師の役割は、子どもたちの学ぶ意欲を止めないこと、子どもたちがやりたいことを実行するための必要な環境(場所と時間)を用意すること、子どもたちと共に問題を解決していく過程を考え楽しむことなのではないだろうか。

本実践を行った2年間、学校全体に生徒と共に考える雰囲気が広まった。多くの学校職員が、授業や行事の在り方を生徒と共に考え、創造していく場面を意図的につくってきた。そして、どのような問題も学びにつなげていけるように、生徒の活動を支援してきた。その結果、生徒たちには様々な問題に対する当事者意識が醸成され、問題と向き合い、「自分たちなら乗り越えられる」と新たな道を創造していくようになった。本実践と同様の方法ではなくても、子どもと共に考える教育は大きな可能性を秘めている。これからも、子どもと共に考え、主体性や創造性を育んでいける教育を広めていきたい。

(2) 子どもたちの想いを大切にしてい

生徒Aの授業のとき「人がいる限り殺処分0に